第４章　平成３年度山口大学構内の立会調査

第１節　吉田構内の立会調査

1　農学部仮設プレハブ倉庫設置に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　P･Q－17

調査期間　平成３年５月31日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約21㎡

調査結果　仮設プレハブ倉庫設置に伴い、基礎部分の南北3.7m×東西5.7mの範囲を、幅30cm、深さ20cmの布掘りの掘削に立ち会った。掘削深度内はすべて校地造成時の埋め土であった。底面には客土と考えられる、地山と同質の赤褐色粘質土がブロック状に見られ、また底面に貼り付くようにビニール等が混入していた。工事による掘削が浅いために地山面は確認していない。

埋め土から２点の須恵器片を検出したが、小片で図化はできなかった。

また、併せて西隣の実験園で踏査を行い、土師器、須恵器片を11片表面採集し、内３点が図化できた。

出土遺物（Fig.18）

いずれも仮設プレハブ設置地点の西隣の実験園で表面採集したものである。

１は須恵器の直口壺と考えられる。胴部の最大径は復原値で15.7cmである。肩部に２条の沈線を巡らせる。肩部は傾斜が大きく、胴部とはほぼ直角をなす。内外面とも回転ヨコナデで調整する。胎土は直径0.5mm以下の細かい砂を多く含む。焼成は堅緻で、内外面とも灰白色（N7／0）を呈する。２は須恵器の椀と考えられる。高台は高く、外端面が跳ね上がり、内端面が接地すると考えられる。外面には高台を貼付けた時の粘

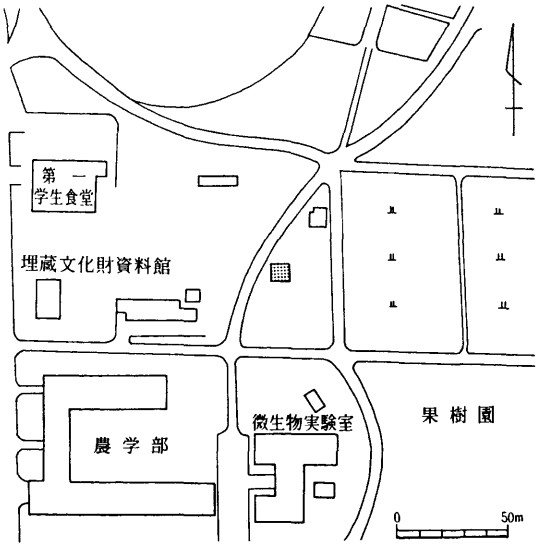

Fig. 16　調査区位置図

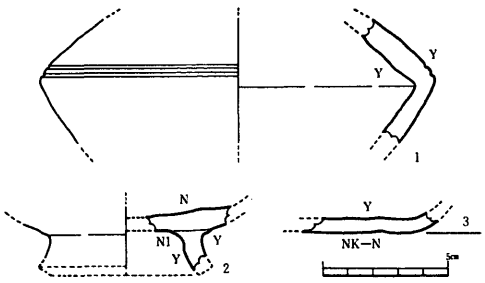

Fig. 17　出土遺物実測図

土の盛り上がりが見られる。内面はナデ、高台の内外面は回転ヨコナデである。底部の切り離しははっきりしない。胎土は直径３㎜位の砂をやや多く含む。焼成は良好で、内外面とも灰白色（N8／1）を呈する。３は須恵器の坏と考えられる。底部外面はヘラ切りの後粗いナデを施すが、凸凹が大きい。内面は回転ヨコナデを施す。胎土は直径２㎜までの砂を少量含む。焼成は堅緻で、内外面とも灰白色（10YR8／1）を呈する。

これらの遺物は、いずれも７～８世紀代の可能性が強い。農学部農業環境観測実験施設敷地の発掘調査時にも、同時期の須恵器が第２層の客土から多く出土し、害虫学実験畑付近から流れ込んだと考えられた。今回の踏査地はその害虫学実験畑のすぐ下位に当たり、当該地にも流れ込んだ可能性は充分に考えられる。以上のように北東方向から延びる丘陵上には古代の集落関連遺構が分布している可能性が示唆できる。今後、この周辺地域での工事には慎重な対応が望まれる。　（古賀）

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』、1992年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「汚水排水管等総改修に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。

2　農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　P－16

調査期間　平成３年11月13日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約８㎡

調査結果　工事は吉田構内の中央部からやや南西に位置する微生物実験室（旧解剖実習棟）の北側に排水管を埋設するものである。調査地域は第２章で述べた農学部連合獣医学科棟新営予定地のすぐ西側に位置する。工事規模は微生物実験室に沿って長さ約14ｍ、幅約60㎝の範囲を現地表面から約70㎝掘削するものである。堆積層順は極めて単純で、層厚約25～35㎝の構内造成による埋め土の直下に地山である明黄褐色粘土（10YR6／8）が検出される。遺構、遺物は認められず、わずかに管路中央部付近で旧水田に伴う暗渠を検出したにすぎない。

大学統合移転前の旧水田耕作土、床土がみられないこと、旧水田暗渠の深さが吉田構内の既往の例と比較してかなり浅いこと、また、調査地域がそのすぐ東側に位置する果樹園と比べて約５ｍ近く低位にあることながら、吉田構内で弥生時代以降の遺構検出面である明黄褐色粘土が構内造成によって大規模に削平されていることが窺われる。

なお、農学部連合獣医学科棟新営予定地で検出した、縄文時代晩期の河川跡の東岸は調査区内では検出できず、その規模を判断する資料が得られた。

（河村）

Fig. 18　調査区位置図

3　大学会館前庭部記念植樹に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　L・M－16

調査期間　平成４年１月17日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約２㎡

調査結果　植樹予定地は上下二段ある大学会館前庭部の下段部分の西側が選定された。

前庭部の下段部分では昭和60年度の試掘調査によって、弥生時代前期～中期初頭の袋状竪穴、弥生時代後期の竪穴住居跡などが検出され、また、遺物包含層からは弥生時代から室町時代の多量の遺物が出土している[1)]。特に、遺構は西半部を中心に濃蜜に分布しており、最も浅い地域では現地表面から約10～15㎝下位で遺物包含層もしくは遺構が検出されている。

植樹は５本で、現地表面から約30㎝の掘削を行うため、遺物包含層もしくは遺構に影響をおよぼす恐れが十分に考えられた。そこで、試掘調査の所見をもとに関係部局と協議した結果、植樹地点を埋蔵文化財に影響のないと考えられる位置に変更することで合意が得られた。しかし、昭和60年度の試掘調査では前庭部の下段部分のすべての範囲について調査を行ったわけではないため、西端部３本、東端部２本に変更した植樹地点についても念のため立会調査を実施した。その結果、西端部では遺物包含層、東端部では遺構面が検出されたが埋蔵文化財に影響のない地点に植樹が行われた。（河村）

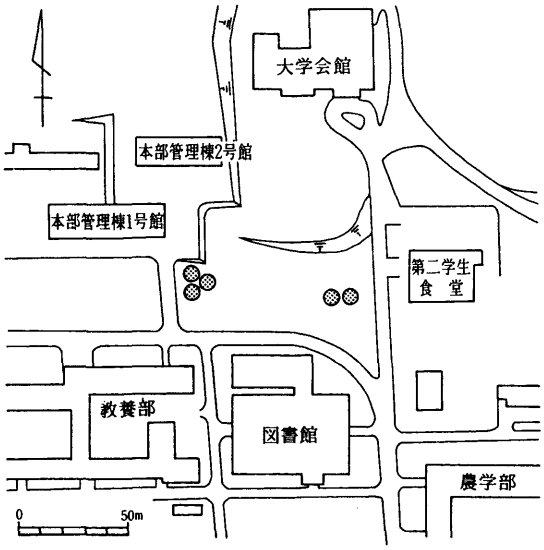

Fig. 19　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

4　サークル棟新営に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　E・F－14

調査期間　平成4年2月7日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約1㎡

調査結果　調査地域は吉田構内の西端部にあたり、同構内の西縁部を北東から南西方向に流れる九田川の川岸付近に位置する。サークル棟は解体後、既存の位置に新営するものであったが、今回の調査地域周辺は過去に調査事例が少なく、埋蔵文化財の分布状況がよくわからない地域のひとつであるため立会調査を行った。

調査は撤去される基礎部分について行い、現地表面から約60cm下位までの地下の状況を観察した。その結果、工事範囲内はすべて構内造成による埋め土で、顕著な遺構、遺物は認められなかった。なお、サークル棟西側のプール部分では昭和61年度の立会調査で遺物包含層が検出されている[1]が、検出面はかなり低位にあることから、当該地域周辺では大規模な掘削深度を伴う工事に際しては調査が必要と考えられる。　（河村）

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内水泳プール改修等に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。

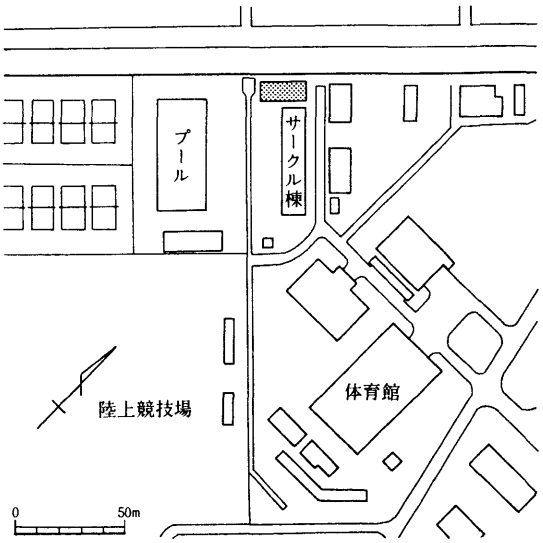

Fig. 20　調査区位置図